



東京多摩プロバスニュース

第 92 号



■事務局: 〒206-0013 東京都多摩市桜ヶ丘 1-53-28 鈴木泰弘方 ■電話: 090-4846-7183

■URL: <http://www.tokyo-tama-probusclub.com> ■編集・発行: 広報委員会 2021. 1. 13.

共に学びながら、高齢化社会に貢献しよう

第 197 回 定例会

日 時 : 令和 2 年 11 月 4 日(水)午後 1 時 30 分より

場 所 : 関戸公民館第 3 学習室

お客様 : 河内成幸様

出席者 : 22 名(会員数 29 名)

第 198 回 定例会

日 時 : 12 月 2 日(水)予定するも急遽中止とした

理 念

1. 豊かな人生経験を生かし地域社会に奉仕する
2. 活力ある高齢社会を創造する
3. 会員同士の交流と意欲の向上をはかる
4. 非政治的、非宗教的、非営利的であることとする



ごあいさつ



国難の時代を生きる

小林務研修・親睦委員長

謹賀新年 本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年令和 2 年はコロナに明けてコロナで暮れた、戦後 75 年嘗て類を見ない国難の年でありました。今年こそは近くの神社の初詣も、コロナ収束と平穏無事なる年である事を心より祈りました。我が多摩プロバスクラブも全ての活動が中止、休止、延期を余儀なくされて今年度の活動計画等も先の見えない閉塞状況にあります。しかし人類の叡智と科学は必ずやこの国難の打破に向かって敢然と闘い、勝利を収める日が来ることを念じつつ、行く末を案じてばかりいても妙案は浮かばない。唯一私達誰もが出来得る新型コロナ感染防止対策の基本に帰り、「三つの密」を避け、「五つの小」を守る日本人特有の国民性と慣習が、文化



と合わせ信念を持って励行し、これがコロナ収束への近道に思えます。予防薬、治療薬については専門家、科学者、医療従事の専門家に委ねる事として、さて疲弊しつつ減衰する経済の建て直しに、私達多摩プロバス会員に

何が出来るのか、高齢者の多い我がプロバスクラブに於ける経済再生に、持続可能な活動として手紙、電話、メール等による自粛中でも出来る情報交換により、まず高齢者其々が健全に生きる為の健康管理と、其々に合った散歩、ウォーキング、適度な運動を心掛けてまずは新型コロナ感染は勿論、他の病気にも罹らない健康な心身の維持、是がひいては高齢者医療費の削減に繋がり、財政面に対して微力ながら経済再生の一助になる事を信じて、今日も目標の 8 千歩を、冬枯れの寒風に負けず、瞑想に耽り楽しみながら、唯ひたすら歩きます。



ふんすい橋 : 豊ヶ丘南公園から落合地区へつながる橋で、橋の中央から上之根通りの「モミジバフウ」紅葉が楽しめる！

1. 幹事報告

飯作金彦幹事

1.1. 活動報告

前号報告の通り5名の新会員を迎え、更なる感染予防に心がけて活動していくとしたが、急激な第3波のコロナ蔓延の状況の下、11月の理事会において下記の通り活動の延期を決定し直ちに会員各位に通知した。誠に残念です。

- ①定例会12月、令和3年1月・2月は延期とします。
- ②3月以降については1月の理事会にて検討します。
- ③本年12月の忘年会は実施しない。
- ④12月～2月の誕生祝いは3月以降にする。
- ⑤理事会は継続して開催する。
- ⑥プロバスニュースは予定通り1月に発行する。
- ⑦各委員会活動は状況を見ながら委員長判断で行う。
- ⑧年会費の後期分は従来通り納入をお願いする。
- ⑨第17期は事務局を鈴木泰弘会員宅に置く。

1.2. 会員の動向

- ・小林伴子氏の1月入会を承認した。
- 藤寄喬子・阿部華歌会員の紹介による。

1.3. 会員構成(令和3年1月13日現在、敬称略)

- ・会員：29名(内休会5名 上田清・神谷真一・鈴木達夫・滝川益男・中村昭夫)、会友：6名(青木ひとみ・大澤亘・小池博・瀬尾日出男・永島仁・蓮池守一)

1.4. 東京八王子プロバスクラブ特別例会に出席

- ・11月12日(木)11時～15時、日本閣にて。
- 講演：井上栄氏「コロナウイルスと日本人」
- 朗読：青羽美代子氏 山本周五郎作「不斷草」
- 出席：当クラブより秋山正仁・北村克彦・小林務・鈴木泰弘各会員の4名。

1.5. 第17期事務局；鈴木泰弘会員宅に置く。

2. 委員会報告

2.1. 総務委員会

鈴木泰弘委員長

- 1)11月4日(水)第197回定例会では、多摩市在住の世界的版画家 河内(かわち)成幸氏をお迎えした。

講話；「版画という不思議な世界」 関連記事P3参照

2)今後の予定

- 12月、1月の卓話は延期とする。
- ・3月以降の定例会開催の可否は理事会にて決定する。

2.2. 研修・親睦委員会

小林務委員長

令和2年度上期の活動につきましては、新型コロナウイルス感染防止対策により残念ながら全て中止となりました。

下期令和3年2月より6月の活動につきましては、コロナ感染状況も見据えながら下記活動を計画中です。

- 1)令和2年3月もしくは4月定例会の卓話に、友人の山田義男氏「府中浅間山自然保護会」会長に交渉中です。
- 2)3月下旬～4月上旬にお花見開催を予定。
- 3)4月以降の予定として私より寄稿若しくは卓話を検討。詳細は総務委員会と相談。

2.3. 地域奉仕委員会

澤雄二委員長

コロナ禍が収まらず、委員会活動はほぼ全面的に停止。

その中で、TV等で活躍されている白鷗大学教授岡田晴恵氏の講演を多摩市企画講座として準備を進めています。公民館との共催として、理事会の了承を得ました。

テーマは「コロナ禍の対応」とし、日程は令和3年6月13日(日)、関戸公民館ヴィータホールを予定。

クラスター感染を避けるため講師からの強い要望で「オンラインセミナー」とする。初めての事であるので、公民館の紹介で甲府のYCC社に実施方法の指導を受けている。予算・最終日程等の調整を委員会で鋭意取組中です。

2.4. 広報委員会

伊藤健一委員長

- 1)プロバスニュース第92号を1月13日(水)発行・配布。
- 2)コロナ禍のため当分の間、定例会、諸活動が制約されていますが、当会報の発行はできる限り継続していきたい。編集内容は、自由寄稿(趣味・特技・トピックス・エッセイ等々)と卓話的なシリーズ等を中心としたものを検討中です。皆様からのご提案、ご協力をお願いします。

- 3)当クラブのホームページの更新は1月13日(水)を予定。

◆◆◆ 寄 稿 ◆◆◆

ウイズコロナの日常

清家美紗子会員

楽しい余生をどう過すかと考え始めた時に、人生で初めての苦難を感じて、何気なく過ぎて来た日々を振り返ってみました。私は戦前・戦後の辛い事も記憶になく平穏な毎日をも有難いとも感じず過ぎて来たんだと思います。

昭和25年隣りの国の動乱により日本の景気も良くなったようでお金があっても食料が手に入らない戦後から、お金があれば食料が手に入る様になった頃から、私の記憶の中にある幼少期の日常でした。

友とのふれあいが楽しくなり高校での3年間でデザインスクールへ通った2年間で人見知りだった性格が変わったようです。

その後結婚し、子供が生まれ、子育ての中で子供を通していわゆるママ友が出来、一緒にお茶をしたり、買い物に出掛けたりして楽しく過ごしたのもその時期の日常でした。

プロバスからお誘いを頂き、入会し新しい方々との出会いを楽しみにしていましたが、コロナウイルスの感染拡大で種々の会合が中止・中断されたことは残念ですが、出口のないトンネルは無いと思い、ウイズコロナの日常は、正しく恐れ、今じゃなくても出来る事はアフターコロナでやればよいと思っています。

アフターコロナでも手洗い・マスク・ソーシャルディスタンスを心掛けながらの楽しいふれあい方を見つけたいのですね。ウイズコロナもアフターコロナもポジティブに考え、過す事がこれからの日常の始まりだと考えて居ります。ご指導・ご鞭撻の程宜しくお願い致します。



版画という不思議な世界

版画家 河内成幸氏



絵画表現でとても大切にしている事に、マチエールという言葉があります、フランス語です。日本語に訳すと、肌合い、とか地肌と言います。画家の皮膚感覚とか言う物で、心の中の動きとか、筆さばきとか、作家のタッチ見たいな物を味わう事なのです。描かれた絵の表面を見るのではなく、描かれた絵を透して、作家のタッチ、描かれたモチーフへの思いを感じる事なのです。これからお話する、私の話を聞いていただいて、私の表現への思いと、表現された絵のマチエールを感じていただけたら、とても嬉しいのですが。

まず、私がなぜ版画表現を選んだのか、これからお話をする4つの版画技法を通じて感じていただければと思います。

版画の代表的技法には、まず日本人には馴染みの木版画、そして西欧で生まれた銅版画、そしてリトグラフ(石版画)、現在では色々な所で使われている、シルク・スクリーン(孔版画)があります。それぞれの版の技法は、素材や形式によって違います。当然、そこに表現されたマチエールも違って来ます。私の場合、木版画を選びました。選んだ理由の一つは、日本人だからと言う事が有ると思います。

では、それぞれの版を、本物の絵を見ながら説明して行きます。どうぞ、それぞれの版のマチエールを楽しんで下さい。

木版画から始めましょう。木版画は浮世絵に代表されます。型式的には、凸版画と言います。木と言う素材を、彫刻刀を使って作ります。私のコレクションの浮世絵を見てください。(途中略……この後、四版種の版画を、世界中の版画を見ながら説明する。)

さて、最後は私の絵(版画)です。先ほど、私の版画は、どこかが違うと言いましたが、浮世絵技法の凸版画と、西欧技法の凹版画を重ねて制作しております。今見ていただいている、赤富士の作品は、富士山の赤い色は凸版で刷っていて、空の板目の見える所や、線の部分は、凹版で刷っております。時々、外国の作家の方がこれは、刷ったのではなく手で描いたのではないかと云う人がおります。私の場合この凹版の線表現にて、私の思いを、マチエール化しているのです。

私が版画を選んだ理由には、もう一つ重要な事が有るのです。木版画、銅版画、リトグラフは全て版の上では出来上がった絵と反対の世界を描くのです。それは、真に鏡の世界なのです。ルイス・キャロルの「鏡の世界」「不思議な世界」なのです。仲々、自分自身を生に見る事は、難し

いのです。そこで鏡を見て自分を確認するのです。先ほど言いました、マチエールの話の中で、大事な事は、作家個人が持っているマチエールを、どのように表現して行くかと言う事なのです。そんな時、自分とは何かと言うことがわかればとても良いのですが仲々それがわからないのです。そこで版画の版を鏡として、制作する事で自分を見つめるのです。人間は、自分とは何物なのかを探しにこの世に生まれて来たと言われています。まさに版画の鏡の世界が私にそれを与えてくれているのだと思っております。ある哲学者の言葉や、仏教の教えによると、人間は、自分探しに生まれて来たのだと。私もそう思うのです。何度も生まれ変わり、死に変わり、それを繰り返すことで、自分自身を自覚して行くのだと思っております。そんな時に版画はとても良く私と合ったのだと思います。

今回のコロナ禍に、アトリエで版木を彫りながら、今、この時にこのような事が起きるのか、考えていました。又、2011年3.11の東北大地震の時も同じです。自分の回りで起きるこれらの出来事を私の心の内に入れて、それらをどう表現して行くか、それが私の役目ではないかと思っております。これからの仕事を通じて、日本人とは、又、日本文化とは、の思いを、絵画表現を透して表現して行きたいと思っております。私は、1948年生まれ、戦後生まれの団塊の世代のど真中です。とても良い日本の時代に生まれたと思っております。この時代の流れを踏まえて、私の表現へのマチエールを使い版画の版を鏡にして、自分のできる絵を描きたいと思っております。

○河内成幸氏のプロフィール

国際的版画家。「木版凸凹摺り」という独自の手法により、伝統的な木版画にシャープな凹の線を組み合わせ、独創的な版画世界を表現。国内外の優れた賞を受賞。

近年では、

2011年 紫綬褒章受章

2012年 第一回ノヴォリシビルスク国際版画トリエンナーレ《グランプリ賞》

2014年 紺綬褒章受章

2020年 台湾ミニプリント展《グランプリ受賞》

出身地の故郷山梨県の「やまなし大使」等も務められている。当プロバスクラブの秋山正仁会員とは同じ山梨県人会。多摩市在住。

絵は、河内成幸氏制作の木版画による「21年賀状」

(文責 伊藤健一会員)



東京多摩プロバスクラブの歩み[2] 登坂征一郎会員

当クラブの歩みについて、前号では主にクラブの生い立ちを紹介いたしました。今回は、今後の活動の参考にどんな活動を展開してきたかという観点からまとめてみました。

活動の中核となったのは、地域奉仕活動として学校教育との連携が大きな柱として取り上げられました。

1. 学校教育との連携

多摩市の教育委員会・小中学校校長会などで当クラブの設立趣旨を紹介する機会を得て、各会員が夫々の分野で培ってきた知識・技術・技能・趣味などを社会に還元すべく奉仕活動で教育の一助として、また、教育関係の目指すESDと呼応・連携して進められました。これらは多摩プロバス寺子屋塾の一環として活動しました。

1) そろばん教室：古澤靖雄元会員が、小学3年で履修する「そろばん」の講師として、多摩第2小をはじめ、東寺方小、南豊ヶ丘小、瓜生小、貝取小など学期初めから各学校の先生方とカリキュラムに組み込まれるまでも対応されました。2006年3月から2016年3月の10年間にわたって携わっていただきました。



左の写真は
古澤靖雄会
員の授業風
景

2) ESD(Education Sustainable Development)の主旨に沿って日本伝統文化の継承、国際化に添った支援

- ・吉岡喜久枝元会員の貝合わせの講演と実演
- ・滝川道子会員の礼儀作法、江戸しぐさ
- ・中村昭夫会員、関根正敏元会員の「欧米の子供たちの生活・習慣について」
- ・西村政晃故会員の「ネパールの紹介」などの国際理解授業の支援

3) 戦中・戦後の多摩地域の小学生の紹介

- ・新倉勇造元会員の「戦時中の多摩市民の生活と兵役」
- ・蓮池守一現会友の「戦中・戦後の多摩地域の小学生」など、多摩地域の戦中・戦後紹介がなされた。

以上のように、各会員の得意な分野で活動されました。

4) 多摩市中学生俳句大会の支援

これは、2005年に東京多摩ロータリークラブが主催する市内中学生全員を対象とする俳句大会で、これを契機に当クラブの俳句会の発足。第8回大会(2013年)以降第14回大会まで、毎回約3千句の第1次選考の編集協力を行い、また、第1回～第14回の優秀作品に当クラブから東京多摩プロバス会長賞が贈られました。

2. 地域社会への奉仕

市民との交流の場として公民館と共催で公開講座を開催。

- 1) 2005年4月27日；「多摩市における犯罪事情」：多摩中央警察署田川交通総務係長・他2名
- 2) 2007年12月16日；「最近の青少年の問題行動に対する学校・家庭・地域社会の在り方」：中央大学法学部教授 藤本哲也先生
- 3) 裁判員制度の市民へ啓発活動

市民参加を謳った裁判員制度は戦後最大の司法制度の改革の国家プロジェクトで、これを市民への啓発する勉強会・他、大澤亘会員が中心となり裁判所とタイアップして、多摩市の2公民館、4コミュニティセンター等と協同で、地域の方々に対し、2007年10月の裁判員制度の講演会をはじめとして、裁判員制度の仕組み・裁判員・評議・審理、刑事裁判の傍聴等について、また、TAMA市民大学セミナーなど19回に及ぶ活動を展開しました。

2009年3月の「裁判員になってみませんか」一橋大学法科大学院後藤昭教授による講演会(関戸公民館)をもって啓発活動を収束し、これぞ社会ニーズにマッチしたテーマであったと感動を覚えます。

2009年5月裁判員制度施行され、同年8月に最初の公判が東京地方裁判所で行われました。

4) 市民を対象とした美術展の開催

これは、当クラブの創立5周年記念行事の一つとして、『次の世代に残したい多摩の風景』をテーマに市民から絵画、写真を募集、絵画48点、写真27点応募作品が集まり、パルテノン多摩市民ギャラリーに展示され優秀作品の選考、来館者投票による「新多摩八景」がきまりました。

5) 市民企画講座

創立10周年記念行事として、関戸公民館と連携した2市民講座が開催されました。

①『首都直下型地震とそれを取り巻く環太平洋地殻変動』
東大名誉教授 瀬川爾朗先生

②『温暖化と異常気象』 気象予報士 村山貢司先生

これらの講演録は大澤会員がまとめておられ、また、両市民講座とも地震や異常気象に関心の高まる時宜を得たテーマで、今後とも引き続き大きな関心事と思います。

6) 「多摩プロバスかるた」山田正司会員監修

創立10周年記念行事として、会員が多摩の名所名跡を謳いこんだ読み札を作り選考によって読み札を決め、それに沿って、山田会員が現場に赴きスケッチして絵札を作成しました。市内各学校に配布し、またイベントなどで普及に努めてきました。

今後機会があれば、今までに活動してきたことを振り返り、今後の活動につなげたいと思います。

また、当クラブホームページに目を通して頂ければと思います。 URL:<http://www.tokyo-tama-probusclub.com>

イエーメン集落の旅(後編)・北イエーメン
増山敏夫会員

●マナハ・山間の石造の集落

潤れ谷の急斜面に集落が貼りつく。下には緑の段々畑が続く。山頂は金持ちが住み、涼しく眺め良く、外敵からも安全。先は神のご加護に感謝、アッラーに対価の喜捨をする。

山頂の住いは涼し喜捨二両



●イエーメンで一番美しい山頂の集落・アルハジャラ

石積の家々が山頂に貼付き岩山と一体となり壮観な眺めだ。眺望と涼しさ安全性は何物にも代え難い。でも水汲みは大変。谷底の水汲み場まで往復2時間余り、これは女の仕事である。イエーメンは男女同権でないのだ。

水瓶を運ぶ額の玉の汗

●サナー旧市街の高層住宅群

シバームと並ぶイエーメンのもう一つの集落世界遺産。2000~3000mの岩山に囲まれた高原盆地にある。王制が倒れるまで、ヨーロッパ中世のブルグの様に街ぐるみ厚い壁で囲まれていた。5つあった市門は大門のイエーメン門のみが残る。5kmに及ぶ市壁も観光資源として僅かに残る。

起源は2千年前の塩市場。人間、塩がなければ生きてゆけない。この塩市場を中心に多くの市場が形成され、商人が住み付き、モスク、宮殿、アンマーム(蒸風呂)、菜園などを備えた、大きな街になった。山岳部族や盗賊に襲われないよう街ぐるみ市壁で囲み、兵を雇い防衛を固めたのである。市壁に囲まれた1.4km²に今も5万人が住み、24時間350人を超える。



サナー旧市街の路地

モスクや菜園、市場を除けば更に数字は上がり、超高密度住宅街である。安全な壁の内側に住もうと空に伸びる方法を選んだのである。幸い地震も無い強固な地盤だった。建材の石は近くに幾らでもある。

自然にできた石畳に沿って、5~8階建、間口4~5間位が隙間なく並ぶ。迷路のような迫力のある道空間だ。築300年、400年はざらで、500年を超える住まいもあるという。1階は堅牢な扉の玄関口と家畜小屋、階段だけで、通風穴だけの暗闇の空間。2階は穀物蔵兼物置で通風穴があるのみで同じく暗い。更に石の階段を登り3階以上が住まいになっている。台所とトイレ以外は居間があるのみ、食事もある寝るのもこの居間、男女は別々の階になる。トイレはシバ

ームと同じく階ごとにずらしてあり、1階家畜小屋の肥溜めに落ちる仕組み。そして最上階にはサナーの特徴的な部屋である、マフラージが載る。半円形のカマリア窓が付く持出しや露台、屋上テラスが設けられた男の談話室である。マフラージとはアラビア語で出口という意味だという。つまり天に近い部屋という意味だろう。涼しく眺望が最高の部屋である。ここで男達は親しい仲間を集めて談笑する。時には「カートパーティー」をやる。回教国なので酒はご法度、代わりに弱い覚醒作用のある大麻のようなカートの新芽を摘んで口に入れて噛み頬に溜めてまた噛み繰り返す。噛み尽すと壺に吐き出す。こうして過ごす時間が男にはたまらないのだ。

男だけにアッラーのお許し若葉噛む

石造とは言ってもほとんどの家は建物の基礎に当たる1,2階までと階段が石造で、あとは厚い干し煉瓦で出来ている。窓回りやエッジ、壁の目地に漆喰をラフに盛り上げた装飾性の強いデザインは、日本のナマコ壁とは異質ながら装飾効果は抜群である。全ての建物が上へ横へとこのデザインで展開する景観はメルヘンチックですらある。「アラビアンナイト」の背景はこのような世界だったのかと納得させられたのである。こんな住いの1軒に案内され、階段を上り、部屋を覗いた。部屋に家具らしい物は肘掛とクッション、あとは敷物の絨毯があるだけ。膝を延したり胡坐をかいたり、居心地よく寛げる。食事は敷物に食器を広げ、右手で直に食べる。我々の住いの家具の多さをふと考えさせられた。

こんな住まい方だから何百年も住み続けられたのだろう。爺を頭に3世代は当たり前、血縁で



マフラージが載る高層住宅

繋がる2~3所帯が一緒に、20人、30人が住む家も多いと聞いた。階段に色ガラスを嵌め込んだ小窓が美しい光を放っていた。

ビードロ窓一色ごとの涼しさよ

一瞥はチャドルの隙間夏衣

羅や香一筋の石畳

アフリカの貧国の多くがいま、大国の代理戦争に巻き込まれ、内戦禍にある。イエーメンもその一つだ。人々は飢餓とバッタ禍、コロナ禍と四重苦に喘いでいる。旅行で訪れるところではない。早く平和な世に戻ることを祈るばかりである。参考文献(佐藤 寛著「イエーメン もう一つのアラビア」アジア経済研究社)

◇◇◇ 寄 稿 ◇◇◇

「牛」

阪東熙子会員

今年の干支は、辛丑(かのとうし)です。辛は同音の新の字につながり、草木が枯れ新しい世代に生まれ変わる状態を言い、丑は紐が、からむの意を含み、種の中で芽は生じているが、未だ外には現れない状態を言うのとあります。丑は動物の牛の事。さて「酥(そ)」の字を用いる乳製品が仏教との因縁浅からぬ事は、余り知られていません。釈迦の悉達多(シッダルタ)が痩せ衰えて山から下りかけた時、少女が捧げた、煮つめた濃い牛乳を飲み、活力回復し 35 歳の時に、菩提樹の根元で悟りを得た、出山の釈迦の画は有名です。又、牛を追う牧童の姿に仮託して、禅の修行のプロセスを十段階に示した「十牛図」は中国、宗の時代に作られました。今、私の手許にある十牛図は、北宋の十二世紀、梁山に居を持つ、廓庵師遠の画かれた絵にあわせた

- ※偈頌(げじゅ)と、それを口語文に訳した物の写しです。他に分かり易く和歌に表した訳もあります。
- 一. 尋牛、二. 見跡、
 - 三. 見牛、四. 得牛、
 - 五. 牧牛、六. 騎牛帰家、
 - 七. 忘牛存人、八. 人牛俱忘、
 - 九. 返本還源、
 - 十. 入廬垂手(にってんすいしゅ)、の十枚です。

好きな分野なので寝食忘れて調べる内に、奥深く此れを解釈するとは、身の程知らずと自戒し、又「燈心で須弥山を引き寄せる」に似たりと気付き、加えて原稿字数の少なくなきを好都合と解説を中止させて戴きました。後日、出直しできる様、熟読玩味致します。



四. 得牛



六. 騎牛帰家

モウ数えの 94 歳、年嵩の私は、牛を馬に乗り換える機敏な行動も出来ず牛歩の昨今ですが、禅語の「垣をへだてて角を見、是れ牛なるを知る」の意を体し、全貌を察知する洞察力を養い、牛後とならぬ様、心掛けたいと存じます。今回の牛の涎の様な拙文を、お目通

し下さりありがとうございます御座いました。

モウ駄目モウ無理と、モウしながら、今年もお仲間に入れて頂きとう存じます。よしなに。

※偈頌: 仏教の真理を、詩の形で述べたもの

◇◇◇ ハッピーバースデイ ◇◇◇

10 月に誕生日を迎えられました！



寺田桂子会員

◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

明けましておめでとうございます。

昨年からのコロナ禍は未だに終息の気配が見えず、私たちプロバスクラブの活動も止まったままですが、このプロバスニュースを通してそれぞれの情報が伝えられればと期待しております。

河内成幸氏による「版画という不思議な世界」のお話で、自分とは何か、日本人とは、日本文化とはの思いを絵画表現を通して示されるという事を拝聴し、今更ながら芸術作品の観方を教えられたように思います。

また、小林務委員長の「自粛中でもできる情報交換で、それぞれに合った健康管理と運動を心掛けよう」という提案に賛成です。

増山敏夫会員のイエーメン集落の旅・北イエーメンの卓話の報告は、お得意な俳句を交えたお話で、行ったことのない世界に引き込まれました。

登坂征一郎会員の東京多摩プロバスクラブの歩みでは学校教育の中でこれまで、ソロバン教室、日本伝統文化、国際化、戦中戦後の生活に関する授業に連携したこと、地域社会への奉仕として市民企画講座の開催など、プロバスクラブとしての理念に沿った活動を振り返ったものです。

我が東京多摩プロバスクラブは創立 17 年になりますが、多くの創立以来の会員がいなくなり、新しい会員が多くなった現状で、改めて過去の活動の状況を振り返って今後の活動に備える意味でも良かったと思います。

今回の寄稿文は、新しく入会された清家美紗子会員からでした。定例会で直接お話を伺う機会がない状況ですので、お考えになられている事など伺えてよかったですと思います。

さて、今年の干支は牛です。当クラブの最高齢で博学多才な阪東熙子会員の「牛」、勉強になります。ウシに曳かれてこの一年を無事に乗り切りたいと思います。

(広報委員 北村克彦会員記)